

---

# **英雄不在の物語**

古時計

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

英雄不在の物語

### 【Zコード】

Z8847Y

### 【作者名】

古時計

### 【あらすじ】

忘却症と呼ばれる、あらゆるものに忘れられ、やがては世界から消えゆくという正体不明の現象がある。

その忘却症が流行した世界で忘却症に対する耐性を持つていた西野壹伊は、不運なことに忘却症の正体が見えてしまう特殊な体质だった。

そんな彼がある日、似たような境遇の少女と出会い、そこから物語は始まる。

やがて彼は、忘却症とそれを利用する者達に立ち向かうことになつ

てゆく。文字道理、想像力を武器にして。

彼が持つのは英雄願望。

とうにこの世界から消失した英雄。

その代わりになろうとしていた。

敵対するはこの世界の真理。

全てを飲み込む忘却症。

果たして彼は大切な人々の記憶を守れるのか？

## 追憶のモノローグ

過去も今も忘れたくない

（1）

「嘘をつくなっ……」

その言葉を聞くと女は憐れむような目で俺を見た。

「嘘じやないわ。あなたは、孤児なの。母親なんてそりゃほいなかつたのよ?」

「黙れっ…… 嘘をつくんじゃないっ…… 母ちゃんは、母ちゃんはつきまでこにこにこにこだじやないかっ……」

いつも言つて母さんが先程までいた場所を指差す。

「……あなたは、何を言つているの?..」

喚く俺と母さんがいたはずの場所を交互に見て、女は信じられないとよくな顔をした。

「母さんは確かにこにこにこたんだっ…… それは、あんただつて知つてる」とじやがないかっ……

そり、あんただつて母さんのこと知つてゐませじやないか。  
なのこ、  
なのこひうじつて、そんな田で俺を見る…？

「吉伊君つー…」

女が俺の名前を叫んで、類を平手でぶつ。

「なつ……」「  
いい加減にしなさこいつー！　あなたの母親なつて、はじめからい  
こにはいなか  
たのよー！」

女は俺を睨みつけながら、そんなことを口にした。

それなら、それなりひうじつて、俺はいりにくる。  
この家に住んでいる？

そうじて、絶望に支配される。  
小窓こ頭の想に出だ。

（2）

俺を引き取ることになつた神父、橋本さんへ一皿見ていつまつ  
た。

「さうか、君は覚えているんだね

他の人が俺に向ける目とは違う、温かい目で。

「他の人が、忘れた記憶を」

そして、橋本さんは話してくれた。

忘却症。

そう呼ばれる、恐ろしい病気の話を。

俺の母さんを殺し、皆の中から消し去つた。そして、今も世界を蝕んでいるその病気のお話を。

忘却症というのは、その名の通り、忘れさせる病気だ。正確には忘れられるだけでなく、同時に忘れさせる病気だそうだ。記憶を、愛を、楽しみを、悲しみを、憎しみを、忘れさせる。人から、いや、人だけではない。全てから。

橋本さんの話では、ほぼ全ての人間が忘却症に感染しているらしい。

ただ、極稀に忘却症にある程度の免疫を持つ俺みたいな人間もいるのだという。

。

彼はそんな人々と共に忘却症と戦っているそうなのだ。

原因不明の病、忘却症と。

人々の大切な記憶や思いを守る為に。

この日から、橋本さんは俺の父親のような存在になった。  
人の為に戦う彼は、俺にとっての英雄だった。

（3）

だけど、どんな事にも終わりは訪れる。

「何でつー？　何でなんだよつー？」

その日、俺は寝台の前で跪いていた。

何度も地面に叩きつけた拳が赤く腫れています。

そんなことお構いなしに、俺はさうに拳を振り下ろした。

「免疫がある俺達は忘却症には感染しないんじゃなかつたのかよつ

！　！」

「壹伊

一人荒れている俺にて、寝台の上で寝たきりになっている橋本さんが語りかける。

「忘却症は、始めはただ忘れられようになる病気だつたと言われている。それが今では、忘れられると同時に忘れさせる病気だ。私達が日々成長していつてるよつて、忘却症も日々成長している。進化していくんだ」

橋本さんの言葉に俺は目を大きく開いた。

「そ、んな。そんな」とつてあるかよつ！？」

俺が歯を食いしばり、再び地面に拳を叩きつける。

納得がいかない。

どうして、こう俺の大切な人ばかりが消えなきゃいけないんだ。

「落ち着きなさい、壱伊。人は誰しもやがては死に至る」

「それでもつ！？　いや、だからこそつ！？　駄目なんじやないですかつ！？　あなた

が生きていたことを皆が忘れてしまつ！？！」

俯き、涙を流す俺に橋本さんが優しく微笑みかけた。

「お前が覚えておいてくれるじゃないか」

その言葉に俺は顔を上げる。

「誰もが私を忘れたとしても、きっとお前は私を覚えておいてくれるだろ？？」

私はそれで十分だよ

「そんな……橋本さん。あなたは、俺の憧れでした。俺にとって、あなたは英雄

でした。お願いだから、お願いだから消えないで下さーい！」

そう叫ぶ俺に老人はゆづくつと語る。

「壱伊、君は感受性豊かで優しい子だ。だけど、少し弱いところがあるね。……

強くなりなさい。優しく強く生きなさい。君は私を英雄と言ったね。

でも、私よ

りも君の方がよっぽど英雄に近い。君ならなれるさ、本物の英雄に。

いつか、

..

..きつと「

それが橋本さんの最期の言葉だった。

俺の目の前で、橋本さんは消失した。

昔の母さんと同じように。

橋本さんが消え去った寝台の上には、彼の着ていた寝巻きと、

確かにそこの人

がいた温もりだけが残っていた。

こうして英雄は消失した。

歴史に名を残すことなどなく。

人々の記憶からさえ消されて。

そして、俺はまた親を亡くした。

（4）

俺は数人のガラの悪い少年達に囲まれていた。

知った連中が大半だ。

昔、神父の橋本さんが面倒を見ていた連中。  
だけど、きっと何も覚えていない。

そいつらの内の一人が口を開いた。

「お前だろ？」Jのほつらい教会に住んでるイカレてるガキってのはよ」

「……だったら、何だつていうんだよ？」

吐き捨てるよつて返事を返す。

橋本さんに関わる記憶を全て忘れていたせいか、一、一ビ面識があるはずの俺のことを今まで覚えていないようだ。

「なんかお前とその教会見てるとムカつくんだよ。お前も、消えろよ」

その言葉と共に拳が飛んできた。

殴り飛ばされて、俺は汚い地面に転がる。続いて蹴りが上から降り注ぐ。

橋本さんにに関する記憶は忘れてしましたのに、あの人への負の感情だけが残つているのか。

だけど、俺は手は出さない。

見えてくるからだ。

Jの少年達が近い内に消えるのが。

俺には見えている。

忘却症という病に、彼らが蝕まれているのが。

半透明になつた彼らの姿が。

きっと、彼らは色々な人から忘れられて、心の傷口を舐め合い、自分を守る為に集まつてゐる。

だけど、もう彼らは助からない。

「ボロい教会だな、俺達が綺麗に彩つてやるよーーー。」

蹴りをくわえていた一人がスプレー缶を取り出して、教会の壁に向けた。

派手な色が教会の壁を汚していく。

自分の体が熱くなつていいくのが分かつた。

「やめひつーーー。」

まとわつついでくる奴らの手を振り払い、スプレー缶を持つ男へと走る。

させない。

あの人があいた場所を汚すような真似は、絶対させない。

「あ?」

振り向いたスプレー缶の男を殴りつける。

「痛えな、ふざけんじゃねえぞつーーー。」

殴った男に首を掴まれ、俺は地面へと投げつけられた。他の奴らもやってきて、やがて世界が真っ白になった。

「ねえ、大丈夫？」

その声で目を覚ました。

目の前には一人の少女がいて、倒れている俺に手を伸ばしていた。

だが、そんなことよりも俺の注意は教会へと向かっていた。

落書きされている。

心ない言葉や、汚い絵で、大切な教会が、あの人がいた場所が汚されている。

「クソッ」

差し出された手を無視して起き上がり、足を引きずつて教会へと向かう。

そして、デッキブラシと水の入ったバケツを取り出してきて落書きを消し始める。

スプレーの汚れはなかなかとれない。

いつの間にか先程の少女がデッキブラシを持って横にいた。

「どうやらお前がしてくれるらしい。」

「誰かが、この場所にいたのよね？　あなたにとつて大切な誰かが？」

壁を擦りながらそいつ言った少女に、壹伊は壁を磨く手を止めずに同意する。

「ああ」

「わう。あなたは覚えていいことができるのね」

その言葉に手が止まった。

「あんた……一体？」

思わず俺は少女の方を向く。

少女はセミロングの落ち着いた茶髪に温かい茶色の瞳が優しそうな印象を与える、かなり整った顔立ちをしていた。

その少女が口を開く。

「ねえ、私達の所に来ない？　きっと世界が変わるわよ」

「だから、全ては始まった。」

## 追憶のモノローグ（後書き）

感想、評価、誤字脱字報告等して頂けると嬉しいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8847y/>

---

英雄不在の物語

2011年11月26日17時49分発行